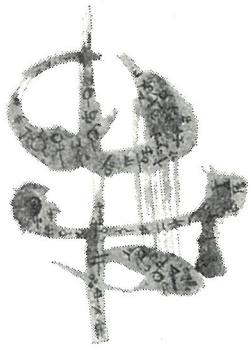
カイロ滞在



井内陸亘

父なるナイル

「エジプトはナイルの賜もの」とは紀元前五世紀、ギリシャの歴史家ヘロドトスの遺した有名な言葉だが、ペルシャ湾のバーレンからアラビア半島の広漠たる砂漠の上をジェット機で横断すること約三時間。紅海に出たとき、まるで細い糸にしか見えないスエズ運河が目に映る。エジプトの黄色い砂漠の中に一条の緑地帯が南から北へ連なって、遠く青い地中海に大きなデルタを作って注いでいる。

これが全長五七六〇米、世界第二の大河ナイルである。

カイロの街が見えてくると、この大河は市街を二本に分れて悠々と流れており、多くの歴史と神秘と伝説とを秘めているに相応しい貫禄を備えているようにさえ感じられた。丁度夏から秋にかけての洪水による土砂で水が赤褐色に濁っていたが、三、四〇〇米もあろうかと思える川幅一面に、蕩々と流れている様子はさすがであった。

日本のダルマ船に太さが電柱くらいもある二、三〇米の帆柱に白布を張って上下する船が多く、又、ホテル形式を取入れた巡航船が両岸に多く並び、夜のとばりが下りるとビヤーホールに、ナイトクラブに、そしてホテルになって、ヤシの並木の間から青い灯、赤い灯が洩れてくると南国情緒はたっぷり味わえるというもの。

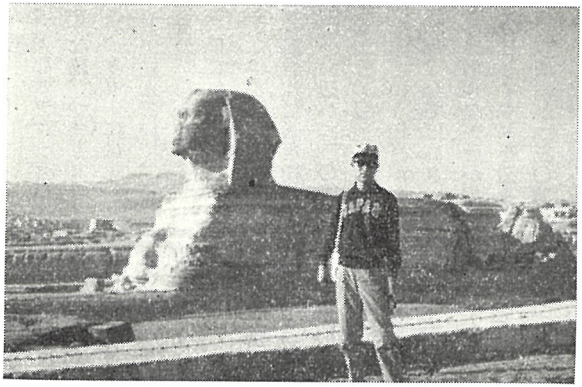
寒ささえ感じるほど涼しいナイルの川風の下でビールの味も格別だろうとうらやみつつ、そこはスポーツ選手の辛さ、ジュースばかり飲んでいたものである。

幸か不幸か、これら巡航船の一隻が我々日本選手団とイギリス選手団との宿舎に当てられたため文字通りナイルに浮んで二十日間暮した訳である。

カイロ市街

カイロに入ってまず最初感じたことは蠅が非常に多く、食物に集るどころか、われわれの顔にばかり集り、鼻や口元にいつも三、四匹くっついてくるのだから、不愉快この上なく、全く仕末におえない。

街を歩くと建物、人々の姿など全体的に中世の街と近代の街とが同居している面が多い。その中世エジプト的な街に入ると「アラビアン・ナイト」を想起さすようで、少々心細く無気味な感じさえ漂っており、しかも、住む人々は特に不潔そうで、ゴミは全部家の



ギゼーのスフィンクス

前の道路に捨てるのだから驚いた。

砂漠に取囲まれているカイロの街は、湿気が殆どなく、日中のきつい日照りに加えて朝夕は風が吹きつけるため、これらゴミはすぐ乾燥し、風にのって飛び散る。したがって、蠅にとっては乾燥したゴミよりも、人間の顔の方に水分あり、塩分ありで好物だろうと悟ったのだが……。

この不愉快な街の一角にあるバザール（市場）は典型的な中世の町並で、いろんな珍しい品が売られているだけに、行きたくもあり、又生きて戻れるかどうかなどと聞かされるとおじけづいたりしたものだ。とにかく勇気を出して袋小路へ入って見物したのである。

バザールは貴金属店通り、象牙細工店通り、民芸品店通りなど、一間半ほどの通路の両側に同じ物ばかり売る店が並んでいるのには全く驚いた。特に金細工の通りへ入ると百米ほどの袋小路は全体が黄金色に輝き、まばゆいばかりの金細工のショー・ウインドウは「スゴイ！」の一言につき、そのうえ、安価だと聞いたので益々買い気を誘われ、せてめエンゲージ・リングぐらいはと思ったが、金の国外持出し厳禁と聞かされガッカリ！また、食肉店通りでは、店頭に羊や牛の頭がゴロゴロしており、気の弱い人なら卒倒しかねないほどだ。

一方、ナイル河畔にそびえる近代エジプトのトップ・クラスである十数階建の「ナイル・ヒルトン・ホテル」に入ると、赤いじゅうたんを敷きつめたロビーの正面に、十米四方もあろうかと思える大壁面彫刻岩をはめ込んでいる。当地を訪ねた旅行客に四、五千年前の古代文明の香りを嗅いでもらおうとしているのだろう。カイロは日中は三十五度以上にも気温が昇るが年に三、四度しか降雨がないので、湿気が少く、そんなに暑いとは感じなかった。しかし商店は午后ほとんど店を閉じ、夕刻五時頃再開するのである。

街を歩いていて最もよく目につくのが果物店と理髪店。この果物店の店頭にはバナナ、マンゴー、スイカはもちろんのこと、地中海特産の甘いブドウ、大きなイチジク、日本産の三倍大もあるようなザクロ、そしてナツメヤシの実……、さすが暑い国である。一度理髪店に入った。バリカンを用いる。技術は日本よりおちるが、変っているのは顔剃りである。ひと通りカミソリで剃った後、まず二本の木綿糸を取出し、その中ほどにはめた鉄のリングをブーンと回し、二本の糸に十分よりが掛ったところで、それを頬や額におし当てるのである。すると皮膚の表面でブーンと蚊の鳴くような音をたてて、ウブ毛までがすっかり剃れて（抜けて）しまうといった工合である。剃った後はヒリヒリするのだが、シッ

カロールをつけて、又、それをはたき取り、香水を吹きつけて出来上りという次第、タオルをほとんど使わなかったのは不思議であった。

ピラミッドに登る

滞在中、ギゼーの第一ピラミッドの頂上によじ登った。

ピラミッドはファラオ（王）の墓である。権力大なるファラオは生前よりまるで宮殿のような墓、つまりピラミッドを造ったのであるが、ギゼーには第一から第四までのピラミッドが並んでいて、その最大の規模をもっているのが第一ピラミッド、即ちクフ王のピラミッドである。

さて、これらピラミッドは正方形の底面の上に築かれた三角稜で、クフ王のものはその底面の一辺が二三〇米、傾斜面の角度が五一度五二分、高さが一四七米といわれているが、何千年という年月がたつ内にその頂きが多少くずれ、今では高さ一三八米で頂上に十畳敷ほどの平らな部分が出来ている。ところで、このピラミッドを造るには平均二トン半という大石灰岩が二三〇万個も使われているそうで、その運搬と積み重ねの労苦は言語に絶したものであり、天文学、幾何学、土木工学の粋を集めて、一日十万人の労働者をかり集めて二十年以上も掛ったと聞かされると、その憶測すらぼやけてしまうが、いかにファラオの勢力が強かったかがよくうかがわれる。

ファラオや王妃の棺以外に莫大な金目の埋葬物が一緒に納められ、入口を厳重に封じ、表面を大理石で磨き上げたこれらピラミッドは、七十以上もあり、当時、砂漠の中で朝日、夕日に燦然と輝いたその雄姿は古代エジプト文明の象徴ではなかっただろうか。

だが、数千年の間に表面の大理石は剝されて回教寺院（モスク）の建材にされ、今では石が積まれたそのままの姿になっていた。

観光客に最も親しまれているのが、クフ王の第一ピラミッドで、その内部も見学出来るように蛍光灯までついていた。

しかし、山のようにそびえ立つピラミッドには登るための階段や道などはない。しいてよじ登りたければ、外側の稜線を頂上めざしてよじ登るのであるが、昔からかなり多くの人が登り、その頂上の石にはギリシャ・ローマ時代の人の名前まで刻まれていると聞かされたからたまらない。傾斜五二度近く、高さ一三八米、大体東京タワーの展望台と同じ高さなのだから、まことに危険な登頂である。

積み上げた石のほんのわずかの足場を次から次へとよじ登って行くには、足で登るというよりも、懸垂のようにして膝で登らねばならなかったのだが、頂上をきわめた時は全くの感激で、すぐ近くに第二ピラミッドの頂上が、その右手にナイル河、そしてナイルの緑地帯と砂漠との境がはっきり見えてまことにすばらしい景色であった。

頂上は風も相当きつく、石も底辺のものに比べ少し小さく、中央に正式な高さを表わす鉄柱が立てられていた。

選手団のうち、唯一人で登頂したので、下で待っている選手達と合図をしたが、手を上下するくらいが分って声など全然聞えず、目がくらみそうな恐怖を感じさえした。

スフィンクスは第一ピラミッドのすぐ近くにあって、あの奇怪な姿を砂にうずめて東方をにらんでおり、全長七十米ほどあるのだが、ピラミッドの上から見るとネコが寝ころんでいるような姿で、常にスフィンクスの顔の下からピラミッドをバックにした写真を見て、その大きさに驚いていた者にとっては少なか

らず失望させられた。

しかし、四、五千年もの昔、熱砂の真只中に大芸術品ともいうべきこれらを造り上げた古代エジプト人を、今さらながら尊敬せざるをえなかったのである。

カイロ博物館

古代遺跡を見て古代エジプトに取りつかれてしまった私は、ナイル河畔の有名なカイロ博物館（エジプト博物館）へ入った。ここは先史時代からグレコ・ローマン期までの遺品を集めた古代エジプト美術の宝庫であり、後に見物したルーヴル博物館、大英博物館と比較して、遺品のスケールの大きさは問題にならないほど大きく、おびただしい数の大石像を、よくもこんなに運び込んだものだといまさらの如く感心する。

象形文字の刻み込まれた彫刻、ピラミッド内部から出土した王、王妃の装飾品の数々、パピルスに記された書物、三十数体のミイラを収めたミイラの部屋、そして王家の谷の奥深く今世紀になって発見されたトウト・アンク・アモン王の埋葬品の全てがそっくりそのままに置かれている部屋へ入ると、当時の王族の生活がはっきり分るのであるが、とにかく金属の部分は全て純金を用いているため、今だに黄金色に輝き、特に王のミイラをすっぽりかぶせている厚さ一寸ほどの純金の仮面、首飾り、胸飾り、腕輪、指輪にいたるまで全て豪華絢爛たる純金と宝石ばかりで、その他の調度品、衣類、娯楽品にしてもすばらしいの一言につき、本当に去り難いところであった。

陳列されている沢山の彫刻の内でも女性、特に王妃の顔はまことに美しいと思った。一般にはクレオパトラが美人の代表にされているが、エジプトではネフェルチチ妃が最も美人とされていて、その目元、口元の作りは最高のように感じられた。四、五千年も前の女性の顔ではあるが現代でも十分通用すると感じ、気に入ったのは私だけではなかったようである。

エキゾチック・ムードを満喫させるヤシの並木、大河ナイルの流れも、ピラミッドも、そして砂漠も、幾千年来変ることなく、モスクの鐘の音が夕日に染ったナイルの川面を響いていることだろう。

「ひとたびナイルの水を飲んだものは再びナイルに帰る」と大昔から言い伝えられているそうだが、幸いにして再びエジプトの土を踏めるのはいつの日か……。

（文学部事務室職員）

（註）筆者は昨年十月、カイロにて開催された第三八回世界射撃選手権大会に日本選手団の一員として参加した。

同志社辞典

同志社の歴代総長

初代社長　新島　襄（明21・9～23・1）
二代社長　小崎弘道（明25・3～30・4）
三代社長　横井時雄（明30・5～32・3）
四代社長　西原清東（明32・7～35・3）
五代社長　片岡健吉（明35・3～36・10）
六代社長　下村孝太郎（明37・3～39・11）
七代社長　原田　助（明40・1～大8・1）
八代総長　海老名　弾正（大9・4～昭3・11）
九代総長　大工原銀太郎（昭4・11～9・3）
十代総長　湯浅八郎（昭10・2～12・12）
十一代総長　牧野虎次（昭16・7～22・3）
十二代総長　湯浅八郎（昭22・4～25・6）
十三代総長　大塚節治（昭25・8～38・11）
十四代総長　住谷悦治（昭38・11～　）